

# 水の 話

FUJI CLEAN NEWS

no.  
177

[特集]

## 輪中の暮らしから生まれた 水防災意識。

先人の知恵から学ぶこれからの水防災意識社会

# 輪中の暮らしから生まれた水防災意識。

## 先人の知恵から学ぶこれからの水防災意識社会

日本のほぼ中央に広がる濃尾平野には、木曾川、長良川、揖斐川の3つの川が流れています。  
この雄大な川は、肥沃な土を運び、農業に適した土壌をつくりあげてくれる一方で、  
ひとたび大雨が降ると洪水を起こし、人々を脅かしてきた歴史を刻んできました。  
川から与えられ、川に奪われる日常を繰り返し過ごす人々。そこから私たちが学ぶのは、  
自然の摂理に対する覚悟と心構え、そして人とのつながりの大切さでした。



国営木曾三川公園展望タワーから見た高須輪中。今も美しい田畑が広がっています

### 濃尾平野と木曾三川DATA

【流域面積】木曾川：5,275km<sup>2</sup> 長良川：1,985km<sup>2</sup>  
揖斐川：1,840km<sup>2</sup>  
※木曾川上流河川事務所HPより

木曾三川は、東から木曾川、長良川、揖斐川からなり、流域面積9,100キロ平方メートルの大川です。この3つの川の土砂の堆積によってできたのが濃尾平野であり、岐阜県南西部から愛知県北西部、三重県北部の一部にかけて広がっています。かつては海でしたが、長い年月をかけて川によって土や石が運ばれた肥沃な土地で形成されています。

## 水害大国・日本がめざすべきこれからの水防。

### 『大洪水は発生するもの』

#### 多発する水害から、新たな意識変革を提言。

2017年7月、九州北部地方を襲った豪雨は、観測史上1位となる降水量を記録し甚大な被害を及ぼしました。2015年の鬼怒川決壊、2014年の広島県での土砂災害など、近年の日本では、局地的な大雨（いわゆるゲリラ豪雨）などによって毎年のように大きな被害を伴う水害が発生しています。昔から日本は、梅雨と台風時期に降雨量の偏った気候や急峻狭隘な地形などの要因により、各地で水害を起こしてきた水害大国であり、ひとたび大雨が降ると洪水や冠水などの被害が度々おこる河川領域が存在していました。しかし近年

の治水整備によって堤防建設が進むと、次第に農村部の湛水型の浸水被害は減少していましたが、その一方で都心部での内水氾濫や、集中豪雨によって堤防が決壊する外水氾濫での被害が増加しています。

こうした状況を受け、国土交通省では「大規模氾濫に対する減災のための治水対策検討小委員会」を設置し、2015年12月に「水防災意識社会再構築ビジョン」を掲げました。この「水防災意識社会再構築ビジョン」では、「施設の能力には限界があり、施設では防ぎきれない大洪水は必ず発生するもの」へと意識を変革し、社会全体で洪水に備える必要性を訴えています。つまり、水害を防ぐ対策に加え、氾濫が

発生した場合にもいかに被害を軽減するかという考え方を持って、水防建築の再考や、地域内の自助、共助の重要性を提言しています。

今や水害は、河川流域だけでなく、多くの人に被害がふりかかる可能性があり、決して無関心ではられない課題の一つです。かつて川辺に暮らす人々は、毎日のように川を眺め、川の異変をいち早く読み取る観察眼を持っていたといいます。そして日頃から常に水への備えや非常時を予見し、その地域ならではの知恵を持っていました。川とともに日常を営んでいた先人たちの暮らしの知恵を知ることは、今後想定できない自然と共生していく私たちの道しるべとなるかもしれません。



### 近年の大雨による災害事例 2014年～本年

※死者10名以上の被害が発生した災害を抜粋

2017年7月-----  
梅雨前線および台風第3号による大雨と暴風(九州北部豪雨)  
梅雨前線や台風第3号の影響により、西日本から東日本を中心に局地的な大雨となり、九州北部で多量の土砂が流出するなどの被害が出た。

2016年8月-----  
台風第7号、第11号、第9号、第10号および前線による大雨・暴風  
相次いで発生した台風が、北海道と岩手県に上陸。記録的な大雨によって、高齢者グループホームなどが土砂災害の被害にあった。

2015年9月-----  
台風第18号による大雨(関東・東北豪雨)  
西日本から北日本にかけての広い範囲で大雨となり、利根川水系鬼怒川で堤防が決壊し、4,300名が救助された。

2014年8月-----  
前線による大雨  
西日本と東日本の広い範囲で大気の状態が不安定となり、非常に激しい雨が降り、広島市では大規模な土砂災害が発生した。

# 日本を代表する「輪中地帯」を有する木曾三川流域。

## 木曾三川流域で輪中が形成された理由

日本における代表的な洪水常襲地帯に、「輪中」があります。「輪中」とは、洪水を防ぐために集落や農用地を輪形の堤防で囲んだ地域を言いますが、なかでも濃尾平野を流れる木曾川、長良川、揖斐川の木曾三川流域は、日本を代表する輪中地帯の一つです。濃尾平野は、地殻運動によって平野の西側ほど地盤が低くなっているため、最も高い東側の木曾川から、長良川、揖斐川の順に高低差ができています。濃尾平野の周りに降った雨が周辺の山から急激に流れだすと西南濃地方に一挙に集まるため、増水すると合流点で逆流してしまい、水をあふれさせていました。

さらに、この地域の洪水多発を決定的なものにした要因に、徳川・尾張藩による御囲堤の築造があります。御囲堤は、徳川家康が尾張の平野を木曾川の洪水から守るために、木曾川左岸の犬山から弥富までの約47キロメートルにわたって右岸よりも高く築いた堤防のことを言います。つまり幕府は、自分たちの領地を守るため、反対側の美濃に洪水がいくように堤防を造ったのです。そのため、洪水常襲地帯となった木曾三川流域に住む農民や地主たちは、その対応策とし

て集落の周りを取り囲むように堤防を造り、次第に「輪中」を形成していきました。「輪中」は、川の周りに強固な堤防を築くことができない人々が共同して造ったため、「輪中」の「輪」は、土地を囲む堤防の形だけでなく、水害から暮らしを守るための人々のつながりも表していると言われています。

### ○ 輪中のなりたち

最初は川の流れを防ぐように、上流に面したところにU字形かV字形に築いただけでした。これを「尻無堤」と言います。その後下流から逆流する水を防ぐため、下流にも堤を築き、これを「懸廻堤」と言います。これが輪になり「輪中」と呼ばれるようになりました。



## 水の恩恵と水の脅威を享受する岐阜県の輪中

明治時代の初め頃までは、木曾三川流域には小さな堤防で囲まれた約80の輪中がありました。これほど多くの輪中があるのは、世界でもこの地域だけです。現在は、治水工事や道路の改修などによって、大きな堤防(輪中堤)だけが残っていますが、なかでも大垣市の大垣輪中、西濃地区南部の海津市の高須輪中が知られています。

大垣市は揖斐川水系の自噴帯にあり、良質で豊かな地下水の恵みを受ける「水の都」と呼ばれる地域です。市内には揖斐川、杭瀬川、水門川をはじめとする15の一級河川が網目のように流れています。さらに、木曾三川のうち一番土地の低い揖斐川流域であることから、昔から常に水害に苦しめられてきました。揖斐川流域で主な輪中がつくられたのは、1600年から1700年頃で、大垣輪中が出来上がったのは1653年と言われています。大垣輪中のように輪中の中に小さな輪中があるものを「複合輪中」といい、これらの小さな輪中の多くは、徳川氏の家臣である戸田氏鉄公が大垣藩主となった1635年ころからの新田開発のときに、農地と集落を守ろうとしたことから自然堤防がつながり輪中堤となって

いきました。

もう一つの高須輪中は、現在、町村合併を経て海津市の一部となっていますが、明治の版籍奉還以前は高須藩と言います。木曾川、長良川、揖斐川に挟まれていることから、北東から南西に向かって土地が低くなっている濃尾平野の中で最も低い低湿地帯で、海拔0メートルの一大水田地帯として知られています。また、川の堆積作用によって造成されてきたこの地域は、川の上流から栄養素を含んだ土砂が絶え間なくこぼれてくるため、作物がよく育つ肥沃な土壌となっています。水害から身を守り、田畑や家屋を守りたい農民は、御囲堤をつくる経済力、政治力もないことから、輪中をつくるしかありませんでした。当時、農民の間では「5年に一度収穫があれば平年作、3年に一度収穫があれば豊作なり」と言われていたほど、水害に苦しめられていたのです。

- 1: 長良川と揖斐川の間には三川分流の工事の際に植えられた千本松原が並ぶ(国営木曾三川公園展望タワーより)
- 2: 海津市にある平田公園付近の輪中堤は、春は桜並木が美しい観光スポット
- 3: 肥沃な土地だった輪中では、米作りが盛んに行われていました

## 木曾三川



揖斐川は福井県と岐阜県の県境の冠山、長良川は岐阜県北部の高鷲町の大日ヶ岳、木曾川は長野県木祖村の鉢盛山を源流としています。

木曾三川流域は雨が多く、年平均降水量はおよそ2,500mm~3,000mmと、日本の平均降水量1,718mmを大きく上回っています。

# 「備えあれば憂いなし」を実現する輪中の暮らし。

## 水屋から学ぶ水防建築と高い防災意識

輪中地域において、水害から自分たちの財産や村を守るために造ったのが「水屋」と呼ばれる建物です。輪中地域の家を見てみると、長年の経験に基づいた効果的な家づくりが行われており、屋敷内に水が入らないように盛り土や石垣を積んでかさあげしている場合が多く見られますが、水屋はさらに一段と高く石を積み上げて建てた避難小屋です。洪水で母屋が浸水することを想定したもので、洪水時の避難場所であると同時に、米や味噌、たまりや重要な什器類を備蓄し、水が引くまで長期にわたって生活することもあったと言います。また、洪水の備えとして船を軒下につるす「上げ舟」や、6月から10月の出水期に欄間の下に棚を設けて高所に物を上げるようにした「上げ棚」、浸水時に滑車を使って仏壇を屋根裏や2階へ引き上げる「上げ仏壇」など、浸水に備えた工夫が随所に見られます。しかし、水屋を持てるのはかなり裕福な家に限られており、水屋を持たない人は屋根裏や近くの堤防に避難したり、「助命壇」という共同の避難所に逃げたそうです。この地域では、常に水害に対する危機意識を持ち、非常時用具を準備し、生活習慣として心がけることで、水害被害の軽減に努める生活が営まれていたことがわかります。

さらに輪中地域を歩くと、所々に小さな祠や石碑を見かけます。これは、水に悩み苦しんだ輪中の人々が、決壊した堤防や危険な川の屈曲部に祠を建立し、水難除けの守護神として信仰したものです。また、一度決壊した堤防は再び同じ場所が決壊する傾向が極めて強いため、その場所の危険性を後生に伝承する意味もあったようです。他にも、決壊した場所や決壊危険地点には、決壊碑や防災倉庫も数多く点在しており、先人たちの想いが刻まれています。

## 輪中に暮らす人々の願いを叶えた治水工事

このように輪中の人々は、水への脅威を常に意識しながらも、工夫を凝らしながら地域に根付いた暮らしを営んできました。しかし、大雨ごとに流路を変え、縦横無尽に濃尾平野に入り乱れて流れる木曾三川は、輪中を形成してもなお毎年のように洪水を起こしていました。1753年、江戸幕府はついに改修の必要性を認めざるを得なくなり木曾三川の治水工事を決めました。ところが、幕府が治水工事の実施を命じたのは、美濃とは関係のない薩摩藩。これは、西国大名の筆頭である薩摩藩の勢力を弱める目的もあったと言われています。その後、1754年よりスタートした治水工事は困難を極め、薩摩藩士は工事中51人の割腹者と32人の病死者を出しながら1755年3月に完成。これを「宝暦の治水工事」と呼び、治水史上最大の難工事と言われる偉業は、今も称えられています。

さらに明治時代に入ると、政府は木曾三川を分流する大がかりな改修工事を決めました。治水の先進国であったオランダの技師ヨハネス・デ・レーケを招き、木曾川下流の三川分流を主体とした下流改修計画を立案し、1887年度より改修工事が始まると、さまざまな洪水に見舞われながらも滞りなく進められ、1900年に分流工事を終えることができました。

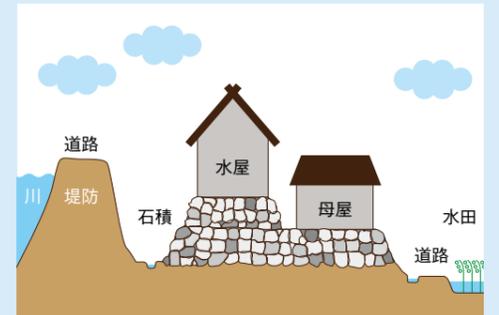
こうした度重なる治水工事や土地改良、堤防の強化、排水機の整備によって木曾三川流域の水害は激減し、西濃地域一帯は、現在のような発展を遂げることができました。しかし、大垣市や海津市などの輪中地域には、他の地域では見られない特有の生活文化が、今もなおたくさん残っています。水屋は、水防建築としての役目を終え、多くは物置として使用されていますが、現在も街のあちこちで見ることができます。その趣ある佇まいからは、この地を理解し暮らしていた人々の“覚悟”と“工夫”を垣間見ることができます。



- 1: 輪中生活館で公開されている旧名和邸の母屋の内観。土間の上には、上げ舟が取り付けられています
- 2: 国営木曾三川公園に復元された水屋。輪中の農家の暮らしを見ることができます
- 3: 共同の避難所として使用された海津市本阿弥新田に残る助命壇
- 4: 揖斐川小段にある水神で、堤防の切所
- 5: 1896(明治29)年の大洪水点を記した洪水碑
- 6・7: 「宝暦の治水工事」で犠牲になった人々をまつている治水神社には、薩摩藩士の像がおかれています

### ○ 水屋の種類

- 1. 住居式水屋 人が起居できる構造を持つ居間があり、畳敷きの1~2部屋からなるもの。床の間や便所の施設を持つ普通の住居。
- 2. 倉庫式水屋 主に米蔵や家財道具入れの機能を持つもの。平時には倉庫として使い、水害時には避難場所となる。
- 3. 住居倉庫式水屋 同一建物のなかに居室と倉庫をもつもので、水屋の典型的なもの。
- 4. 土蔵式水屋 厚い土蔵壁からなる米蔵。入口は二重構造となっているものが多い。



# 地域のつながりで災害被害を食い止める「水防団」。

## 地域力を育てる岐阜市の専任水防団

輪中は囲堤形態を持つ集落を指すだけでなく、水防共同体としての社会構造の意味も含んでいます。だからこそ水防が最大の課題であった木曾三川流域では、早い時期から水防組織が整えられ、水害を未然に防ぎ、被害を最小限に食い止める対策を地域全体で行っていました。

現在は、1949年に制定された水防法によって、規定された水防管理団体として「水防団」が設置され、日本全国で約94万人の水防団員が各地で水防活動に従事しています。水防団の多くは消防団が水防活動を行うのが主流ですが、昔から大雨による浸水被害など洪水の脅威にさらされてきた岐阜市では、数々の水害に備えるために専任の水防団を結成していることで注目を集めています。岐阜市は、市内に29の水防団を持ち、1,600人以上の団員が活躍していますが、これは日本の水防団員14,000人の約10%にあたり、全国に誇る規模と能力を備えていることがわかります。

岐阜市の水防団は、1956年に岐阜市岩野田水防団が最初に結成されたのを起源に、市内各所で結成されていきました。水防団の活動の一つに、水防工法の伝承がありますが、岐阜市の水防団では団員が作成する「土嚢」に特長があります。通常は「口結び」と言われる結び方が一般的ですが、岐阜市では昔ながらの「しおり結び」という方法で土嚢を製作しています。この方法による土嚢作りをはじめ、堤防の修復や補修の方法など、さまざまな水防工法を修得し、日々の訓練によって技術を絶やさないように努めています。

さらに岐阜市の水防団では、小中学生に向けた啓発活動にも力を注いでいます。具体的には、過去の災害や現在の

水防体制について講義をしたり、土嚢づくりや土嚢を積む作業を体験してもらうことで、地域の防災意識を高めています。これら啓発活動は年々活発化しており、2012年には11回だった回数が2016年には37回に増加、参加する生徒の数も約3,800人と5倍以上に増加しています。こうした地道な活動は、水防団と地域との結び付きを強め、新たな水防団員の確保につながっています。また、日頃からさまざまなイベントに参加するなど、地域とのつながりを大切にすることで存在感を高め、地域の連携をつくることで地域力の強化につながっています。

## 想定外の天災に備える地域防災コミュニティ

機能的な水防活動を行うための『水防団』は、近年、改めてその重要性和必要性が見直されています。水防団を通じて、日常的な治水施設の整備や、水害発生時に備えた訓練、地域への水害に対する意識喚起など、地域を自らの手で守ることのできる地域防災コミュニティの構築が期待されています。かつて、丈夫な堤防ができれば洪水はなくなり、私たちの暮らしは守られると考えられていました。そのため、少しずつ自衛意識は薄らぎ、その土地に暮らすための知恵も伝えられなくなってしまいました。しかし、私たちの想定をはるかに超えた天災が起こる今、「もしも」は、決して避けることのできない出来事です。輪中に暮らす人々が、「自らの身は自らが守る」自助の精神でさまざまな事態に備え、日頃から対策を講じてきたように、今こそ、自分たちが暮らす環境をもう一度見つめ直し、安全・安心に生きるために何が必要かを、地域が丸となって学ぶことが必要なのではないでしょうか。

【取材協力・写真提供・資料提供】

大垣市輪中館・大垣市輪中生活館  
岐阜市基盤整備部水防対策課

【参考資料】

輪中 「水都」大垣 水と緑のふるさと  
(大垣市教育委員会文化部文化振興課 編集・発行)  
木曾三川に生きる  
(木曾三川水と文化の研究会 編/株式会社山海堂 発行)  
大垣市史 輪中編  
(大垣市 編集・発行)  
日本の国土とくらし①低地の人びとのくらし  
(千葉 昇 監修・指導/株式会社ゴブラ社 発行)  
水屋・水塚 水防の知恵と住まい  
(佐竹 葉子 発行者/LIXIL出版 発行所)

このたびの九州北部豪雨をはじめ、日本各地で発生しました豪雨等によって被災された皆様には心よりお見舞い申し上げますとともに、一日も早い復興をお祈りいたします。



岐阜市水防団の訓練風景(写真提供:岐阜市基盤整備部水防対策課)



### 大垣の木枡 伝統文化に現代思考がプラスされた、 世界も注目する大垣枡



大垣は、「枡」の生産量全国シェア80%を占める日本一の産地です。元々枡づくりは、木曾ヒノキの産地に近い名古屋で盛んでしたが、一人の職人が奉公を終えて大垣に戻ったことから、枡づくりが広まりました。また大垣では、古くから水運が発展していたため、ヒノキの運搬が容易だったことも、枡づくりが盛んになった要因のようです。2016年現在

では、枡の製造業社は5社となり、年間約200万個を製造しています。枡は古くは計量器として使われていましたが、現在は縁起の良い記念品や、オリジナル枡など、新しいアイデアを加えた枡も誕生し、人気を集めています。さらに、美しいヒノキの光沢と職人の技が詰まった大垣枡は、近年「MASU」と呼ばれ、海外でも注目されています。

ここで購入できます



## 枡工房ますや

岐阜県大垣市西外側町2-8  
☎0584-78-5468

ネットショップ <http://www.masuza.co.jp/>  
営業時間 9:00~18:00(土・日曜は17:00まで)  
体験と工場見学については大橋量器のHPをご覧ください。

定休日 年末年始、お盆

ますやは、木製枡を製造する有限会社大橋量器のアンテナショップです。大垣の枡をひとりでも多くの人に発信したいという思いから、普通の枡だけではなく、デザイナーとコラボしたカラー枡やエコ加温器マストなどさまざまなアイデア枡が販売されています。東海圏のヒノキを使用し、建築材や建具材の端材を有効活用しているので、エコにも優れています。ますやでは、枡の販売だけではなく、枡づくり体験も行っていきます。

Web  
サービス

申請書から設計・施工、維持管理に必要な書類まで、  
ダウンロードが分かりやすく簡単になりました。

フジクリーンのウェブサイトでは、書類や図面、カタログなどのダウンロードを、より分かりやすく、簡単にするためのリニューアルを行いました。ダウンロードページでは、フジクリーン製品をご利用いただく設計事務所様、施工業者様、維持管理業者様などユーザーの方々のご使用目的にあわせ、「申請をする」「設計・施工をする」「維持管理をする」

「カタログを見る」の4つのコンテンツを用意しました。また新製品の登場や、要領書に変更があった場合など、更新情報も分かりやすく一覧にしました。さらにメール登録をしていただくと、更新情報を随時メールにてお知らせする「最新版お知らせサービス」もスタート。ぜひご利用ください。

浄化槽の申請時に必要な書類一式

プロワの情報や現行製品、製造終了した旧製品の維持管理関連書類

更新日時とともに、更新情報が一覧できます

浄化槽の標準図面 (PDF) や施工要領書など

各種カタログPDF

Event

『下水道展 '17東京』に出展。  
ブースやプレゼンテーションへ多数ご来場いただきました。

2017年8月1日から4日までの4日間、東京都の東京ビッグサイトにて『下水道展 '17東京』が開催され、下水道処理関連企業など約350社が出展しました。フジクリーンの下水道展への出展は、昨年に続いて2回目となります。ブースでは、国土交通省が進めている「下水道クイックプロジェクト」のメニューのひとつである「工場製作型極小規模処理施設」を紹介しました。また、8月2日に行われた出展者プレゼンテーションでも、『下水道クイックプロジェクト 工場製作型極小規模処理施設「FGU型」』について紹介し、多くの方に聴講いただき、関心の高さを感じることができました。

下水道展の4日間での来場者数は、55,000人にのぼり、日本の人口減少が言われている速くない将来、持続可能なインフラ整備をどのように構築していくかという点を、業界関係者だけでなく多くの一般の方々に対しても広く理解を深められたイベントとなりました。



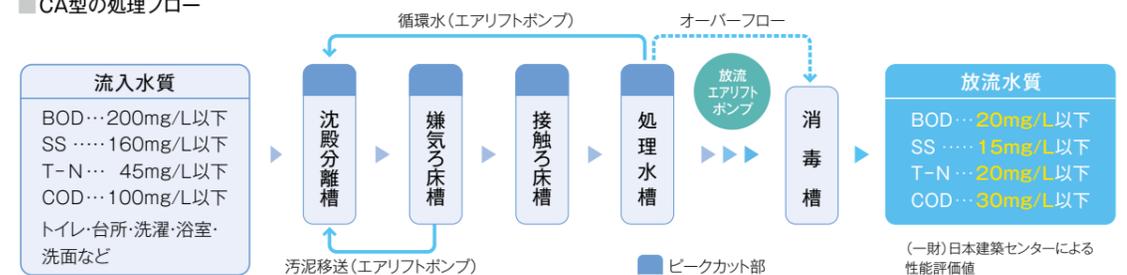
サービス

小型浄化槽CA型のミニチュアモデルを製作しました。  
展示会や講習会でご利用ください。

より多くの方に浄化槽の仕組みや構造を理解いただくため、フジクリーンでは小型浄化槽CA型のミニチュアモデルを製作しました。CA型は維持管理のしやすさに定評のある接触ろ床方式を用いた浄化槽です。ミニチュアモデルでは、普段は目にする事のない浄化槽の内部だけでなく、エアポンプで空気を送れば、実際の浄化槽と同じ水流を見ることができ、展示会や講習会などでの活躍が期待できます。興味のある方は、お近くの営業担当か、フジクリーンホームページよりお問い合わせください。



■ CA型の処理フロー



NEWS

国土交通省から下水道処理区域内に、災害時の利用を想定した  
浄化槽の設置が可能と通知されました。

2017年3月、国土交通省住宅局から「災害時に設ける合併処理浄化槽等の建築基準法上の取扱いについて」各都道府県建築主務部長に向けて通知されました。これにより、浄化槽の災害に強い特徴を踏まえ、下水道処理区域内においても、防災施設として災害時の利用を想定しつつ、あらかじめ合併処理浄化槽を設置することが可能と示されました。具体的には、日頃は下水道に接続されている配管を、災害時には浄化槽に切り替え、下水道のかわりに

浄化槽が汚水を処理して近くの河川等に放流します。浄化槽は地震に強く、東日本大震災において全損したと判断された浄化槽数は、全体の3.8% (平成23年6月環境省調べ)です。こうした実績からも、浄化槽は災害時においてトイレ環境を改善できるなどライフラインを守る重要な役割が期待できます。今後、災害時の対策として、下水道処理区域内での浄化槽設置の拡大が予想されています。

もっと  
motto!  
広げよう

水環境をきれいに  
する取り組み

特定非営利  
活動法人  
イカオ・アコ



## マングローブの植林などを通じて、 フィリピンの人々の生活の向上を支援。



(写真提供：イカオ・アコ)



フィリピンネグロス島のマングローブは、ミルクフィッシュやブラックタイガーの養殖地に転換されるなどの原因で、1950年代のわずか5%まで減少しています。

イカオ・アコはフィリピンの言葉で「あなたと私」の意味。

イカオ・アコは、フィリピンでマングローブの植林事業等を行っている環境NGOです。第二次世界大戦中に日本の通信士としてフィリピンに駐在し、戦後も残留日本人の支援を続けていた土井潤一郎氏と、現代表の後藤順久氏とが、1997年に日本人とフィリピン人が協力してできる植林を始めたことが設立のきっかけでした。当初は大学生を中心としたスターターツアーを企画していましたが、今では全国から若者が集まり年3~5回のツアーを実施し、植樹本数は130万本を超えました。2012年には、より自由にボランティア活動ができるよう、現地に国際研究研修センターを開設。英語のトレーニングを行いながらボランティア活動に取り組める環境を提供しています。

イカオ・アコが活動をする上で大切にしているのは、現地の人々と同じ目線を持つことです。マングローブの植樹や維持管理作業は、現地住民団体と日本人ボランティアとの共同で行っており、マングローブの再生や保護・維持活動を現地住民が主体的に取

り組むことを目指しています。また、環境破壊の根源には貧困の問題があるため、生計の向上も忘れてはいけない視点の一つです。最近では、水源地の森を守るために80メートルも下った谷から水を上げ、灌漑用水をつくりました。この地域では、貧困をしのぐために違法伐採をして炭をつくり生計を立てていましたが、灌漑用水を引くことで炭に替わる野菜や果樹の有機農業が可能になりました。さらに、上流と下流の住民を結びつけ、海岸沿いだけでなく流域全体の環境保全も実現することができました。

イカオ・アコは、2017年に設立20周年を迎え、エコツーリズムやフェアトレード、有機食品を使ったカフェの経営、環境教育支援など、年々活動の幅を広げてきました。その活動は、企業や団体からの協賛も多く、新しい絆が次の環境保全を形成しています。海外支援はハードルが高いと思われるがちですが、今後も日本とフィリピンを結ぶ、手作りの支援の輪を広げていきます。



美しい水を守る

# フジクラ工業株式会社

本社 名古屋千種区今池四丁目1番4号 〒464-8613 TEL (052) 733-0325

<http://www.fujiclean.co.jp>

札幌支店 (011) 882-1222  
東北支店 (022) 212-3339  
東京支店 (03) 3288-4511  
名古屋支店 (052) 733-0250  
大阪支店 (06) 6396-6166  
福岡支店 (092) 441-0222  
盛岡営業所 (019) 604-2527  
郡山営業所 (024) 944-7780

茨城営業所 (029) 839-2271  
宇都宮営業所 (028) 625-4650  
群馬営業所 (027) 327-5611  
埼玉営業所 (048) 620-1424  
千葉営業所 (043) 206-5171  
新潟営業所 (025) 271-8668  
山梨営業所 (055) 275-9300  
松本営業所 (0263) 27-2080

岐阜営業所 (058) 274-1011  
静岡営業所 (054) 286-4145  
四日市営業所 (059) 350-0788  
和歌山営業所 (073) 422-3634  
広島営業所 (082) 843-3315  
高松営業所 (087) 815-0682  
松山営業所 (089) 967-6123  
高知営業所 (088) 803-1520

佐賀営業所 (0952) 31-9151  
熊本営業所 (096) 388-3571  
大分営業所 (097) 558-5135  
宮崎営業所 (0985) 32-3064  
鹿児島営業所 (099) 257-3501  
沖縄営業所 (098) 862-9533



発行 2017年10月1日

フジクラ工業株式会社「水の話」編集室